

「作り能」の初期形態

竹本幹夫

世阿弥の作品の多くは、和歌説話を構想の典拠とし、その和歌を一曲の頂点ともいうべき部分に配することを特色としている。世阿弥以前の能にはこうした方法が用いられることとはないらしく、世阿弥によって創始された作風と考えてはば大過あるまい（拙考「琳阿考」『芸能史研究』53、「世阿弥能作論の形成」『中世評論集』）。ところが世阿弥の能でも、和歌的な世界に典拠を持ちながらそのような和歌が用いられない例もある。入恋重荷Vがその稀有なる一例である。

この能の典拠には『古今集』一〇五八の  
人恋ふることを重荷と担ひ持てあふごな  
きこそわびしかりけれ

が最もふさわしいように見えるが、それではなぜこの和歌が曲中に片言隻句すら引用されないのであろうか。ふまえている作品の文句をまったく引かないということは、世阿弥の場合はしないのが原則なのである。世阿弥はこの歌を入恋重荷Vの直接の典拠とは考えて

いなかったか、初めから知らなかったかのどちらかなのではなからうか。

「人恋ふる」の歌は、恋を重荷に譬えて、「逢ふ期」と「あふご」（担い棒のこと）とを掛詞にした面白さを狙った歌であるが、似通った表現の歌として、『新編国歌大観』三巻解説所収「賀茂保憲女集異本系独自歌」中の「にへ人のもちこすとしのおもぎににあふごたりたりふれるしら雪」などがあり、「重荷」と「あふご」の取合わせは必ずしも恋の題に限るものではなかった。

一方『万葉集』四一〇五／〇七の贈答歌  
かたおもひを馬にふつまにおほせもてこ  
しべにやらば人かたはむかも

常のこひいまだやまぬに都より馬にこひ  
こばになひあへむかも  
『後撰集』恋六・一〇四二  
あふごなき身とは知る知る恋すとて嘆き  
こりつむ人はよきは  
『類聚集』五六八

目をへつつそふるつらさを重荷にてもた  
えはつべき心ちこそすれ

など、恋を荷に譬え、「あふご」「重荷」を恋に取合わせる和歌も少なからずあった。

室町中期の連歌伝書『藻塩草』巻17「荷」では、「おもにもになひもてあふごなき／あふ事をあふごによせたる也」として前述の古今歌を引いており（ただし末句は「くるしかりけれ」）、この頃には、恋を重荷に譬えた和歌の代表格として、「人恋ふる」の歌が認められていたようである。『藻塩草』に先立つ世阿弥の時代にもそうした認識があったかどうかは不明で、「恋の重荷」という題材に対して「人恋ふる」の歌のみが限定的に想起されるというわけではなかった可能性も強い。

入恋重荷Vの内容を検討すると、その取材範囲が和歌の世界ときわめて関連深いことに気付く。修辭的にはかなり乱暴な点があるとされてはいるものの、慣用語や和歌の名文句を頻繁に用いているのである。一見非和歌的素材であるかに見える、「（ポンギ）の」唐国の、虎と思へば石にだに、立つ矢のあるぞかし」などは、実は『中世古今集注釈書解題』の巻一解説13ページ所引の了誉『古今序注』の歌「虎と見ている矢は石に立つなるをなど我が恋のとほらざるらん」などと同類の表現に直接基づくことが想像され、やはり和歌的

表現とみなすべきものなのである。

これらの他では、

夕顔のたそがれ時・荷前の箱・恋の奴・  
ただ頼めしめじがはら・菅笠・ひとり寝  
の我が手枕の肩替へて(以上、第四段)

／あはれてふことだになくは……・恋死  
に・乱れ恋(第五段)／中空になす(第

八段)／吉野川岩切り通し……・言寄せ  
妻・空頼め・(第九段)／うきね・葛の

葉・玉襪畝傍の山・山守もさのみ重荷は  
・浅間の煙(第十段)／思ひの煙・立ち

別れ稲葉の山・恋路の闇(第十一段)

などが本曲中の秀句としてあるが、特定の和歌よりの引用を初めとして、いずれも慣用句に準じた和歌的表現である。これらの語句ははかない期待、裏初りへの恨み、さらに絶望から怒りへと展開する感情の起伏を表わすべく配列され、他方では後述する第11段の例のごとく、文飾によって激情の生々しさを幽玄化し和らげる効果をも与えられているのではないかとすら思われる。

「人恋ふる」の歌は用いらればかなりの効果をこの曲に与ええたはずであるが、例えば「次第」に「重荷なりとも逢ふまでの」などといながら、「逢ふ期・あふご」の肝要の秀句は見捨てられている。意図的な排除というよりは、世阿弥の見落し・書き落しなの

ではあるまいか。「人恋ふる」の歌に本説たる説話があつてそれを脚色したなどの事情があつたとすれば、世阿弥がこの歌を見逃すはずはあるまい。すなわち本曲は、恋を重荷に譬えるという和歌的な修辭を発想の「契機」としつつ、激しい内容の「恋の恨み」の物語を幽玄に描くべく、和歌的な秀句を全体に散りばめたものであり、特定の和歌説話を典拠とするものではなかつたと考えられる。

こうした作風は、須磨の浦のイメージによつて海人乙女の恋物語を構想した(松風)や、恋慕のイメージの構築を狙つて班扇に関する和漢の詩歌の言葉を類聚的に連ねる(班女)等の「作り能」にも通じる、最も初期の形態なのかもしれない。構想・設定は(綾鼓)という翻案原曲に寄掛つた安直なものであり、使用された各文句も、和歌的世界の産物ではあつても、それ自体では相互に関連し合つて独自のイメージを作り上げるところまでいつているわけではない。また第11段の「思ひの煙の立ち別れ、稲葉の山風吹き乱れ」が「思ひの乱れ」を意味するような例は、主題とは無関係に作品の印象を幽玄化するために置かれたものなのであろう。「作り能」以前の原初的方法で幽玄な鬼能を達成することに、本曲の意義があつたのではなからうか。

(実践女子大学助教授)